慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近刊のマルクス伝二種
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1929
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.23, No.5 (1929. 5) ,p.766(124)- 769(127)
JaLC DOI	10.14991/001.19290501-0124
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19290501-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近刊のマルクス傳二種

小泉信三

K. Vorländer, Karl Mark. Sein Leben und sein Werk. S. v, 325. 1929.
Otto Rühle, Karl Marx. Leben und Werk. S. 472. O. J.

私は嘗て「マルクス・エンゲルス傳の發達」を叙して、國家學大辭典中のエンゲルス稿マルクス傳より近刊のリヤザノフ「マルクス・エンゲルス傳」に及んで、略ぼ各書の特長を記したが、（財政經濟時報昭和二年六月號）其後に於てマルクス傳には更に上記の二書が新に加へられた。フォアレンダアのマルクス研究と其のマルクシズムに對する態度とは、既に其の「マルクスとカント」其他の著作に由て知られてゐる筈であるが、本書は啻にマルクスの思想を論ずるのみならず、寧ろ其生涯の閲歴を記すことを主として居る。全篇をマルクスの青年時代（一八一八―一八四八年）壯年時代（一八四八―一八七〇年）晩年（一八七一―一八八三年）及び「現代に取つてのマルクスの意義」の四部に分ち、略ぼ年次を追ふて、彼れの經歴と著作の要項を叙べて居る。本書の第一の特長は、最近に至つて、殊に莫斯科マルクス・エンゲルス研究所員の精勵に依て、始めて發見若しくは印行せられたマルクス文書を多く渉獵利用した上で書かれたことである。例へば最近に於けるマルクス文献學上の第一の功勞者は右の研究所々長たるリヤザノフであるが、而かもそのリヤザノフ自身の「マルクス・エンゲルス傳」は一八二三年に書かれたもので、從つて彼自身に依て發見校訂せられた「獨逸イデオロギイ」の原稿は其中には利用せられて居らぬ。凡そマルクスの思想發達の道程上最も重要なる階段の一は、其のフォイエルバッハに依てヘエゲルを離れ、而かもフォイエルバッハの受動的觀照的唯物論に慊らずして、獨特の能動的實踐的唯物論、即ち唯物史觀を打ち立てた一段、換言すれば一八四四年の「神聖家族」から一八四七年の「哲學の窮乏」への發展である。而して此の兩著作の中間に極めて重要なる「獨逸イデオロギイ」なる道程標があつたことは、マルクス自身の記す所に由て既に久しく知られてゐたが、リヤザノフに依て其原稿の重要なる部分が發表せられたのは、彼れの「マルクス・エンゲルス傳」著作後の事である(Marx-Engels Archiv, Bd. I.)。今フォアレンダアは特に其書の一章を割いて、「獨逸イデオロギイ中に於ける史的唯物論の生長」を論じてゐる。此外彼れはリヤザノフの援助を得て、マルクス・エンゲルス全集の未刊に屬する第一卷第二冊の校正刷を利用し、又直接伯林に於ける社會民主黨文庫所藏の文書をも利用して居る。此點に於て本書は、素と大學に於ける講義に胚胎したもので、決して一大著述といふ迄のものではないかも知れぬが、而かも充分マルクスに關する最近研究の成果に基づいて書かれたものだと言ふ事が出來る。

マルクスの人物に就いては、フォアレンダアは「プロレタリヤ社會主義」に於けるゾムバルトの罵評並に上記リユウレの見解に平ならざるものであつて、篇中諸處に此等の批評に對してマルクスを辯護せんとしてゐるが、而かも必しも彼を曲庇してゐるとは言へぬ。場合に由ては、稍々マルクスに不利と見らるべき事實をも敢て擧げてゐるからである。父の死後、婚約、職業の撰擇、財産の分配其他に關してマルクスが其母と不和に陷つて遂に全く和解するに至らなかつたと見える事實を記してゐる如きは其一例である（六、六七頁其他）。又フォアレンダアが唯物史觀に對しては、少くも因果と目的の問題に就て、マルクスの所説の不完全のものなることを指摘したのは、「マルクスとカント」の讀者には既に知られてゐる事柄である。要するにフォアレンダアはマルクシストではある

が、マルクスを infallible の者としては取扱つて居らぬ。其批判は概して中正であり、又其の各時代に於けるマルクスの著作の紹介は、概して簡短明晰である。要するに、本書はマルクス傳を言ふものゝ必ず逸すべからざる好著として推薦し得るものである。

フォアレンダアの中正なるに對して、リュウレのマルクス論は、頗る奇僻の見解に富んでゐる。就中その甚しきものは、マルクスの人物を其代謝機能の障害に由て説明せんとする試みである。曰はくマルクスの生涯に於て肝臓病は夙くから一個の役目を働いてゐる。此疾病はマルクス家の世襲病と思はれ、マルクス自身と其遺傳があると思つてゐた。彼れは生涯を通じてひそかに肝臓癌を恐れでゐた。彼れの肝臓病は、多分消化器の虚弱と胃腸全體の障害と密接の關係を有したものであらう。「何となれば、マルクスは嘗に肝臓病の徴候に患んだのみならず、重症なる代謝機能障害の發現及び附隨現象と見るべき幾多の病的狀態（食欲欠乏、便祕、胃腸加答兒、痔疾、瘍瘡等）にも患んだからある。彼れは一個の代謝機能に疾病ある人であつた。」（四四三）而してリュウレは玆にマルクスの性癖の説明を求める。例へばいふ。「彼れが食事に對して正しき關係を有せずして、或は少なく或は不規則に、或は不愉快に食べ、併し其代りに其食欲を常に mixed pickles（漬物）や、强き香料や醋漬の胡瓜やカヂャア等で刺戟したやうに、彼れは仕事に對し、人間に對して正しき關係を持たなかつた。惡しき飲食者は惡しき勞働者、惡しき僚友である。彼れは何も食はぬか、胃腑を飽滿せしむるか、全然仕事を厭ふか、仕事の爲めに倒れるか、人間を避けるか、誰もが利益せぬ凡ての人の友となるかである。彼れは常に極端に動く。……學生として講義に出席し、職業の爲めの準備をする代りに、彼れは哲學的文學的 mixed pickles を其精神的胃腑に詰め込んだ。マルクスには規律と秩序の念と攝取と消耗との正しき比例に對する感覺とが欠けてゐた。屢〻幾月も全然筆を執らぬかと思ふと、忽ち學問の深淵に突入してチタンの力を以て勞作し、日も夜も藏書全體を堀り返して山の如き拔萃を作り、部厚なる原稿を書き、其死に際しては半成未完の作物の堆積を遺した。……彼れは甚しく精神的美味を愛する人であつた。屢〻家族は飢に瀕して原稿料を待つてゐるのに、彼れは〆切期限到來の論説をば、常に援助を辭せぬエンゲルスに押し付けて、彼れ自身は希臘羅馬の古典に耽り、圖書館の最も貴重なる寶物を搜り、美味なる文學のカヂャアを舐め、若しくスノッブ的快樂を以て高等數學を營んだ」と（四五一頁）。

リュウレが自らいふ所に由れば、彼れは唯物史觀をマルクス其人の人物の上に試みて此説を得たものである（四三七頁）。唯物史觀を個人の性情行動の上に適用することは決して無意義の試みではない。併し外界の事物の個々人の心意上に起こす反能は數量的に測定し得るものではないから、度或人の性格若しくは其遭逢を例へば其疾病の種類に由て説明せんとするが如きは、今のところ所詮或程の奇警なる觀察と評すべきものたるに止まつて、決して學問上の價値ある結論までは導かぬであらう。往年マックス・ノルダウは“Degeneration”一卷を著し、近世思想界文藝界の偉人等を病人扱ひして當時の文壇に一大センセエションを惹き起こした。リュウレの試みもノルダウの其と同じく、全然無價値なりとは言はれないが、今の學問、今の資料を以てしては、たゞ文學的に興味ある一個の性格解剖たるに留まつて、其以上には出で得ぬものであらう。